

## アン・セクストンの詩 (其のⅡ)

— 解説と訳詩 —

木村 淳子

アン・セクストンの詩を考えると、思い浮ぶ言葉は、「生」「死」「愛」の3つである。これらの言葉は彼女の詩集のタイトルに使用され、詩の中で使用される言葉としては、頻度の最も高いものであり、「生」「死」「愛」をテーマに、彼女はくり返し詩を書いたのであり、いわば、アン・セクストンのトレード・マークとも言うべき言葉である。これらに比べて、さほど多く使用されているわけではないが、気になる言葉がある。それは、“touch”「触れる」という言葉である。

セクストンが、彼女の存在を、不条理なものとして認識していたことは、彼女の詩の中に読みとることができる。彼女の詩作の過程は、この不条理な自己存在の認識の過程であったとすることができる。

「カヨ、私はようやく、私はようやく、自分自身を見つけはじめたようです。——あなたには、私が自分自身を見つけねばならないことが、わかるでしょう。そして私は、何物か、又は何者かにならなければならないのです、必ずしもはっきりと目につくやり方でなくていい、ひそかな個人的なやり方で——」<sup>(1)</sup>

(Kayo, I think I am beginning, and I do mean just beginning, to find myself — you realize that I MUST find my own self and be something or someone, not necessarily in any concrete manner, but in a personal manner —)

Wait mister. Which way is home?  
They turned the light out  
and the dark is moving in the corner.<sup>(2)</sup>

ねえ、待って下さい。うちは何処でしょう。  
灯りは消されて  
闇が隅をうごめいています。

My God, My God, what queer corner am I in?<sup>(3)</sup>

我が神よ、我が神よ、何という奇妙な隅に私は入りこんだのでしょうか。

「私は自分のことばかりを心配しています。しかし今日、3週間の長い抑鬱状態から頭を上げて、他の人たちがいることに気づきました。誰かがいるのです。私はそれを忘れていました。」と、セクストンは、1959年1月11日附の、W. D. スノッドグラス宛の手紙に記している。彼女の苦悩は、ほの暗い闇の世界である、己れの内面の世界に沈潜して、自らを閉ざしてしまおうとする自己と、己れを取りまく外部の世界に気づいて、そちらへ浮上しようとする自己との間の葛藤にある。詩を作ることとは、2つの方向に引き裂かれる自己を1つにまとめ、回復して、外部の世界との接触に到らせる手段であった。「私を救済してくれるように思われるもの、それは詩です<sup>(5)</sup>」と、これもスノッドグラス宛の書簡の中で彼女は記している。こう考えると、詩の中に時折りあらわれる“touch”という言葉が、重みを持って響いてくる。己れの内部の闇に没した自己を回復するためには、外界と接触すること(touch)が必要なのであり、同時に、この不可思議な自己の内面に降りて、分裂した自己の深い溝をのぞきこむことなしには、己れを回復することはできない。つまり彼女にとっては、“touch is all<sup>(6)</sup>”なのである。その時“touch”は、彼女の

実存を支えている1つの願望となる。そして、彼女がこの願望に揺すぶられ、つき動かされて詩を書くとき、詩を作ることそのものが、彼女の実存と強く結びついてしまう。「私の仕事は言葉 (my business is words.)」<sup>(7)</sup> という宣言は、別の色あいを帯びて眺められるようになる。言葉は仕事以上のもの、彼女の実存そのものとからみ合ってしまうからである。

セクストンにあっては、この「星を求める蛾の願い」、つまり分裂している自己の存在の根源をきわめて、1つにまとめたいという願望と、己れの実存に意味を与えてくれるような外部の世界に接触したい、それによって自己の存在の確認をしたい、という願望は、どのような人間にも増して強烈であった。烈しい言葉で、赤裸々な告白の詩を書く、一見リアリスト風の彼女の心の底にあるのは、ロマンチックとさえ言えるような、強い“touch”の願望なのである。しかも皮肉なことに、その願望が強ければ強いほど、目指すものは逃げて行ってしまふ。そこで彼女は、絶望の谷底と、なおも彼女をふるい立たせて、追跡へと駆り立てる願望の山頂との間を、限りなく往復することになる。J. D. McClatchy は、セクストンの詩の欠点の1つに、反覆的 (repetitive) であることを挙げている。<sup>(8)</sup> セクストン自身は、1968年の Barbara Hevles のインタビューに答えて、同じテーマをくり返しても、それは新しい認識を持って、新しい真実をうたうことなのだ、<sup>(9)</sup> と述べているが、実は、McClatchy の指摘するところを肯定しているのである。McClatchy の反覆的であるという、欠点の指摘は、また、セクストンの言葉にも拘らず、テーマの反覆が、彼女の詩の世界の発展にはつながっていないことの指摘でもある。ともあれ、彼女は絶望と願望の間を、限りなく逡巡しながら、詩を書いていったのであった。彼女の詩の世界の狭さは、テーマの反覆性にあるのではなくて、むしろ、彼女が追い求めていたものの実体を、しっかりと見極めることのできなかつた、知的世界の狭さにあったのではなからうか。

さて、セクストンが、フォーマリズムの詩人として出発したことは、衆知の通りである。時間をかけて、彼女はフォームを脱脚し、自由に口語を駆使して詩を書くようになっていった。「私も、詩は口誦芸術であると思っています。しかし、私が死んでしまったら、詩はページの上に書かれたものにすぎなくなってしまうでしょう」と、彼女は、1968年に Paul Brooks に宛てた書簡の中で述べている。彼女は、詩を、音楽の伴奏付で朗読したり、うたったりすることに興味を持ち、詩が口誦芸術であるという主張を持っていた。彼女の詩の伴奏のために、バンドを作ったりもしていた。彼女の詩は、朗読されたり、うたわれたりするときに、一段と魅力のあるものになる。サンドバーグや、マスターズや、さらにさかのぼって、ホイットマンらから流れ出す、アメリカ口語詩の伝統を受け継いでいる、と言えよう。しかし、セクストンの場合は、その口語詩の持つ自由さのなかに限界があるように思われる。J. D. McClachy の言う反覆的 (repetitive) であるのは、テーマに限らない。セクストンは、リフレインを作詩上の手法の1つとして用いる。同じ詩行をくり返したり、同じ言葉を2度、3度くり返して1行を作る。詩が朗読されたり、うたわれたりする場合には、これは効果的であるかも知れないが、印刷されて読まれることになると、煩瑣で、饒舌の感をまぬがれず、反対に、伝えたいと思う内容の希薄さが目についてくる。Ben Howard は、「年月をかけて、セクストン夫人はフォーマリスト風を脱脚して来た。彼女のイメジャリは大胆になり、初歩的な語法を用いるようになった……そして彼女は、精妙さ、洗練には、ますます無関心になっているように思われる。」<sup>(10)</sup>と述べている。

セクストンの詩においては、言葉と言葉の結びつきがゆるやかである。それは、シミリの多用にも一因がある。「……のような」或は「……のように」というような喩え方は、言葉の持つイメージの直接的なぶつかり合い、それによって惹き起されるイメージの展開又は、ショックが弱められてしまいがちである。彼女自身は、たとえを用いるにあたって、

やはり、ある意味でのショックを期待するのは当然で、様々に工夫を凝らしてはいる。しかし、その工夫が適切であるか否かについては、いろいろな議論があって、Ian Hamiltonなどは、「示されているのは、セクストン夫人の発明の才であって、これは決して、最もすばらしい特質ではない<sup>(12)</sup>」と言っている。例えば、“The Touch”の中の1行は、「生命が凝血のように私の指に流れ込んだ。(Life rushed to my fingers like a blood clot.)」とあるが、「生命」と「凝血」は、すなおに結びつかない、異質のイメージを持つ2つの言葉である。このような、異質のイメージの組み合わせは、セクストンの詩にはしばしば見受けられるのであるが、それは、決して、新しいイメージの世界の展開には結びつかないのである。あるいは、「祝福された雪 / が、空から漂白されたはえのようにやってくる。(blessed snow / comes out of the sky / like bleached flies.)」と、雪の降る様子をうたうとき、このたとえが適切であるかどうかには、疑問を感じないではいられない。思いつきのおもしろさ、と考えてみても、このシミリが、詩の世界の展開に役立っている、とは、どうしても考えられないのである。総じて、セクストンの詩には、イメージの展開がみられず、これもまた、詩的世界の限界を感じさせる要因の1つになっているのである。

「言葉に気をつけなさい。 / …… / 言葉と卵は注意して扱わなければ / なりません。 / ひとたび壊れたら、 / 取り返しのつかぬ / もの達だから。(Be careful of words, / …… / Words and eggs must be handled with care. / Once broken they are impossible / things to repair.)<sup>(13)</sup>」と、セクストンはうたった。これは、彼女が自分に向けて発した警告でもあったのだろうか。願望をとげようと、先を急ぐあまり、彼女は不注意にも、足もとを顧みることを怠り、揚句の果ては、望むものに達することができなかつたのではなからうか。セクストンの詩を読むときに、私はいつも、このようなもどかしさを感じるのである。

### The Touch

For months my hand had been sealed off  
in a tin box. Nothing was there but subway railings.  
Perhaps it is bruised, I thought,  
and that is why they have locked it up.  
But when I looked in it lay there quietly.  
You could tell time by this, I thought,  
like a clock, by its five knuckles  
and the thin underground veins.  
It lay there like an unconscious woman  
fed by tubes she knew not of.

The hand had collapsed,  
a small wood pigeon  
that had gone into seclusion.  
I turned it over and the palm was old,  
its lines traced like fine needlepoint  
and stitched up into the fingers.  
It was fat and soft and blind in places.  
Nothing but vulnerable.

And all this is metaphor.  
An ordinary hand – just lonely  
for something to touch  
that touches back.  
The dog won't do it.  
His tail wags in the swamp for a frog.

## 触れる

何か月間も私の手はブリキの箱に閉じこめられていた。  
そこには地下鉄の手すり以外はなかった。  
多分、手は打撲傷を負っているのだろう、と私は思った。  
だから、閉じこめられたのだろうと。  
しかし、私がおぞくと、手は静かに横になっていた。  
これで時間が測れるかも知れない、と私は思った。  
時計のように、そのいつつの節と、  
皮下の細い静脈とによって。  
手は、知らぬ間に導管によって養われている  
無意識の女のように、そこにあった。

手、身を隠してしまった木彫の鳩  
は、くじけてしまっていた。  
私はうら返してみた、手のひらは老いていた。  
手の筋は細い針あとのように  
指へと縫い上っていた。  
ところどころ肥えて、やわらかく、何もなかった。  
ただ傷つきやすいただけのものだった。

さて、これはすべて譬え話なのだ。  
ふつうの手——握りかえしてくれる  
なにかに触れようとしている  
孤独な手。  
犬はそんなことはしない。  
蛙を探して尻尾で沼の中をかきまわすだけ。  
私はドッグフードの箱にすぎない。

I'm no better than a case of dog food.  
She owns her own hunger.  
My sisters won't do it.  
They live in school except for buttons  
and tears running down like lemonade.  
My father won't do it.  
He comes with the house and even at night  
he lives in a machine made by my mother  
and well oiled by his job, his job.

The trouble is  
that I'd let my gestures freeze.  
The trouble was not  
in the kitchen or the tulips  
but only in my head, my head.

Then all this became history.  
Your hand found mine.  
Life rushed to my fingers like a blood clot.  
Oh, my carpenter,  
the fingers are rebuilt.  
They dance with yours.  
They dance in the attic and in Vienna.  
My hand is alive all over America.  
Not even death will stop it,  
death shedding her blood.  
Nothing will stop it, for this is the Kingdom  
and the Kingdom come.

*(Love Poems)*

姉達はそんなことはしない。  
ボタンと、レモネードのように流れる涙のほかは、  
彼女らは群がって暮しているのだ。  
父親はそんなことはしない。  
彼は家を背負ってやって来て、夜になっても  
母親の作った機械の中に住み、  
仕事によって油をさされる、仕事によって。

問題は  
私が自分の身ぶりを凍らせてしまったことだ。

問題は  
台所やチューリップにあったのではなく、  
私の頭の中にあったのだ、頭の中に。

やがて、すべてが歴史となった。  
あなたの手が私の手を見つけた。  
生命が凝血のように私の指に流れこんだ。  
ああ、私のカーペンターよ、  
指が再び作られる。  
それらはあなたの指と共に踊る。  
それらは屋根裏で、ウィーンで、踊る。  
私の手はアメリカ中で生きている。  
死でさえ、血を流している死でさえ、  
それを押しとどめることはできない。  
何物もそれを押しとどめることはできない。  
これは王国、王国が来たのだから。

### The Fury Of Sunsets

Something

cold is in the air,

an aura of ice

and phlegm.

All day I've built

a lifetime and now

the sun sinks to

undo it.

The horizon bleeds

and sucks its thumb.

The little red thumb

goes out of sight.

And I wonder about

this lifetime with myself,

this dream I'm living.

I could eat the sky

like an apple

but I'd rather

ask the first star:

why am I here?

why do I live in this house?

who's responsible?

eh?

*(The Death Notebooks)*

## 日没の怒り

何か

つめたいものが大気の中にある，  
それから氷の霊気と  
粘液。

一日中かかって，私は人生を  
作り上げた，そして今  
太陽が沈む  
それを壊そうとして。

地平線は血を流し  
親指を吸う。

小さな赤い親指が  
視界から消えてゆく。

私は

私と共にあるこの人生  
私が生きているこの夢を，不思議に思う。

私は空をリンゴのように  
食べることができるだろう，  
だがそれよりも

私は一番星にたずねたい：  
なぜ私がここにいるのか，  
なぜ私がこの家に住むのか，  
誰に責任があるのか，  
を。

### The Play

I am the only actor.

It is difficult for one woman  
to act out a whole play.

The play is my life,  
my solo act.

My running after the hands  
and never catching up.

(The hands are out of sight –  
that is, offstage.)

All I am doing onstage is running,  
running to keep up,  
but never making it.

Suddenly I stop running.

(This moves the plot along a bit.)

I give speeches, hundreds,  
all prayers, all soliloquies.

I say absurd things like :

eggs must not quarrel with stones :

or, keep your broken arm inside your sleeve

or, I am standing upright

but my shadow is crooked.

And such and such.

Many boos. Many boos.

Despite that I go on to the last lines :

## 芝居

俳優は私ひとり。

女ひとりで ひとつの芝居を

演じ切るのはむづかしい。

芝居は私の生涯を語るもの、

私の独演。

私は手を借りようと走りまわるが、

みつけれない。

(手は見えない——

つまり、舞台裏だ。)

舞台の上で私は走りまわるだけ、

追いつこうとして、

だが、決して追いつくことはできないのだ。

突然、私は走るのをやめる。

(これで筋が少し進展する。)

私はセリフを言う、何百回も、

祈りと独白ばかり。

私はばかげたことを言う、例えば：

卵は石と喧嘩してはいけない

或は、折れた腕は袖の中に隠しておきなさい

或は、私は真直ぐに立っているが

私の影は曲っている。

とか、何とか。

ふう、ふう言う。

にも拘らず、私は最後の行へと進んで行く：

To be without God is to be a snake  
who wants to swallow an elephant.  
The curtain falls.  
The audience rushes out.  
It was a bad performance.  
That's because I'm the only actor  
and there are few humans whose lives  
will make an interesting play.  
Don't you agree?

*(The Awful Rowing Toward God)*

神をもたぬ人間は、象を飲みこもうとする  
蛇のようなものである。

幕がおりる。

観客は走り出て行く。

まずい公演だった。

それはつまり、俳優が私ひとりで

おもしろい芝居になるような人生を持っている

人間が少ないからだ。

そう思いませんか？

### Making A Living

Jonah made his living  
inside the belly.

Mine comes from the exact same place.  
Jonah opened the door of his stateroom  
and said, "Here I am!" and the whale liked this  
and thought to take him in.

At the mouth Jonah cried out.  
At the stomach he was humbled.  
He did not beat on the walls.  
Nor did he suck his thumb.  
He cocked his head attentively  
like a defendant at his own trial.

Jonah took out the wallet of his father  
and tried to count the money  
and it was all washed away.  
Jonah took out the picture of his mother  
and tried to kiss the eyes  
and it was all washed away.  
Jonah took off his coat and his trousers,  
his tie, his watch fob, his cuff links  
and gave them up.  
He sat like an old-fashioned bather  
in his undershirt and drawers.

## 生計を立てる

ヨナは 腹の中で  
生計を立てた。  
私も同じ所で生計を立てる。  
ヨナは彼の専用室の扉を開いて  
言った、「私はここだ！」鯨はこれが気に入って  
彼を飲みこもうと思った。

口のところでヨナは叫んだ。  
胃袋で彼はかしこまった。  
彼は壁を叩かなかった。  
親指をしゃぶりもしなかった。  
彼は自分の裁判に出廷している被告のように  
注意深く首をかしげた。

ヨナは父親の財布をとり出して  
金を数えようとした、  
だがそれは流されてしまった。  
ヨナは母親の写真を出して  
その目にキスしようとした  
だがそれも流されてしまった。  
ヨナは上衣を脱ぎ、ズボンを脱ぎ、  
ネクタイをはずし、時計のくさりをはずし、  
カフスボタンをはずして、捨ててしまった。  
彼は時代遅れの海水浴客のように  
シャツとズボン下のままで座っていた。

This is my death,  
Jonah said out loud,  
and it will profit me to understand it.  
I will make a mental note of each detail.  
Little fish swam by his nose  
and he noted them and touched their slime.  
Plankton came and he held them in his palm  
like God's littlest light bulbs.  
His whole past was there with him  
and he ate that.

At this point the whale  
vomited him back out into the sea.  
The shocking blue sky.  
The shocking white boats.  
The sun like a crazed eyeball.  
Then he told the news media  
the strange details of his death  
and they hammered him up in the marketplace  
and sold him and sold him and sold him.  
My death the same.

*(The Death Notebooks)*

これが私の死だ、  
とヨナは大声で言った、  
それを知ることは役に立つことだろう。  
私は細かな点をよく記憶しておこう。  
小魚が彼の鼻先きを泳いでいった  
彼はそれを記憶しぬめぬめした魚にさわった。  
プランクトンがやって来た。彼は  
神のいちばん小さな電球のように掌につかまえた  
彼の過去のすべてがあった。  
彼はそれを食べてしまった。

するとこの時、  
鯨は彼を海中に吐き出した。  
ショッキングな青い空。  
ショッキングな白い船。  
悩める眼球のような太陽。  
それから彼はマスコミに  
この奇妙な彼の死を詳細に語った。  
すると彼らは、市場で彼を打ち叩いて  
彼を売って、売って、売った。  
私の死も同じであろう。

## The Other

Under my bowels, yellow with smoke,  
it waits.

Under my eyes, those milk bunnies,  
it waits.

It is waiting.

It is waiting.

Mr. Doppelgänger. My brother. My spouse.

Mr. Doppelgänger. My enemy. My lover.

When truth comes spilling out like peas  
it hangs up the phone.

When the child is soothed and resting on the breast  
it is my other who swallows Lysol.

When someone kisses someone or flushed the toilet  
it is my other who sits in a ball and cries.

My other beats a tin drum in my heart.

My other hangs up laundry as I try to sleep.

My other cries and cries and cries  
when I put on a cocktail dress!

It cries when I prick a potato.

It cries when I kiss someone hello.

It cries and cries and cries

until I put on a painted mask

and leer at Jesus in His passion.

Then it giggles.

It is a thumbscrew.

Its hatred makes it clairvoyant.

## もう一人の私

煙で黄色くなった内臓の下で

それは待つ。

こうさぎのような、私の目の下で

それは待つ。

待っている。

待っている。

ドッペルゲンガー氏。私の兄弟、私の配偶者。

ドッペルゲンガー氏。私の敵、私の恋人。

真実が豆のようにこぼれでる時、

それは電話を切ってしまう。

子供をなだめて、胸の上で眠らせてしまうと

リゾールを飲み下すのは、もうひとりの私。

誰かが誰かにキスしたり、トイレの水を流す時、

舞踏室で泣くのは、もうひとりの私。

もうひとりの私が心臓で、ブリキのタイコを打つ。

もうひとりの私が洗濯物を吊す、私が眠ろうとする時に。

もうひとりの私が泣く、泣く、泣く、

私がカクテルドレスを着る時に。

それは、私がじゃがいもをつつく時に泣く。

それは、私が誰かに、こんにちわのキスをするときに泣く。

それは、泣く、泣く、泣く、

そこで私は彩色の仮面をつけて

受難のイエスを横目でみる。

するとそれはくすくす笑う。

それは親指をしめるごう問道具。

憎しみが、それを千里眼にする。

I can only sign over everything,  
the house, the dog, the ladders, the jewels,  
the soul, the family tree, the mailbox.

Then I can sleep.

Maybe.

*(The Book of Folly)*

私はただ、あらゆるものに署名してゆずり渡すことができるだけ。

家，犬，はしご，宝石

魂，家系図，郵便函。

おそらく，

それから私は眠ることができる。

Riding the Elevator Into The Sky

As the fireman said:  
Don't book a room over the fifth floor  
in any hotel in New York.  
They have ladders that will reach further  
but no one will climb them.  
As the New York *Times* said:  
The elevator always seeks out  
the floor of the fire  
and automatically opens  
and won't shut.  
These are the warnings  
that you must forget  
if you're climbing out of yourself.  
If you're going to smash into the sky.

Many times I've gone past  
the fifth floor,  
cranking upward,  
but only once  
have I gone all the way up.  
Sixtieth floor:  
small plants and swans bending  
into their grave.  
Floor two hundred:  
mountains with the patience of a cat,  
silence wearing its sneakers.

## エレベーターで空に昇る

消防士が言ったように：

ニューヨークでは、ホテルの  
5階以上の部屋を予約してはいけない。  
もっと上へ昇る梯子はあるが  
誰も昇ろうとはしないのだ。  
ニューヨーク・タイムズに出ていたように、  
エレベーターは、  
煙の出ている階を感知して、  
自動的に扉が開き、  
閉じないのだ。  
自分を昇りつめて出てゆきたいのなら、  
自分を空に打ち込みたいのなら、  
これらの警告は  
忘れてしまいなさい。

何度も、私は  
5階を通り過ぎて  
ガタゴトと上へ昇っていった、  
そして、たった1度だけは  
ずっと上へと昇っていった。

60階：

小さな植物と白鳥達が  
身体を曲げて墓へ入ろうとしていた。

200階：

猫の忍耐力を持った山々、  
スニーカーを履いた沈黙。

Floor five hundred:  
messages and letters centuries old,  
birds to drink,  
a kitchen of clouds.

Floor six thousand:  
the stars,  
skeltons on fire,  
their arms singing.

And a key,  
a very large key,  
that opens something –  
some useful door –  
somewhere –  
up there.

*(The Awful Rowing Toward God)*

500階：

何世紀も経たメッセージと手紙，  
飲料用の鳥，  
雲の台所。

600階：

星，  
燃えたつ骸骨，  
腕が歌っている。  
それから鍵，  
とても大きな鍵，  
何かを開ける——  
何か大切な扉を開く——  
どこか——  
上のほうの。

— 注 —

- (1) *Anne Sexton: A Self-Portrait in Letters*, ed. by Linda Gray Sexton and Lois Ames, pb. by Houghton Mifflin Company, Boston 1977 p. 24, (以下 *Self-Portrait* と略記)
- (2) “Music Swims Back to me” in *To Bedlam and Part Way Back*, by Anne Sexton.
- (3) “In the Deep Museum” in *All My Pretty Ones*, by Anne Sexton.
- (4) *Self-Portrait*, p. 48, To W. D. Snodgrass, Jan. 11th, 1959.
- (5) *ibid.* p. 51, To W. D. Snodgrass, Feb 1st, 1959.
- (6) “Rowing” in *The Awful Rowing Toward God*, by Anne Sexton.
- (7) “Said The Poet To The Analyst” in *To Bedlam and Part Way Back*, by Anne Sexton.
- (8) “Anne Sexton: Somehow To Endure”, J. D. McClatchy in *Anne Sexton: The Artist And Her Critics*, ed. by J. D. McClatchy, pb. by Indiana Uni. Press, p. 244. (以下 *The Artist* と略記)
- (9) “The Art of Poetry: Anne Sexton”, an interview by Barbara Kevles, in 1968, in *The Artist*.
- (10) *Self-Portrait*, p. 325, To Paul Brooks, circa June 1968.
- (11) a review on *The Awful Rowing Foward God*, by Ben Howard, in *The Artist*, p. 178.
- (12) a review on *All My Pretty Ones*, by Jan Hamilton in *The Artist*, p. 129.
- (13) “Words” in *The Awful Rowing Toward God*, by Anne Sexton.